

広島県立福山誠之館高等学校のみなさまへ

中央大学 文学部 人文社会学科 社会情報学専攻 4年

平田 瑛美 (福山誠之館高等学校 2014年3月卒業)



先生方、お元気ですか。

ピカピカの制服を身にまとい、講堂で迎えたあの入学式がおよそ7年前のことと思うと、時の流れの早さを感じます。

高校での三年間は私にとって濃く、大切なことに気づかせてもらったかけがえのない日々でした。強く印象に残っており、尚且つ今の自分を築く土台となった高校時代のできごとがあります。2年生の冬、SNS上でスポーツ記者が投稿していた、紙面に載せられないこぼれ話に感動したことを機に、文字を通して人の心を動かすことができる記者に憧れを抱きました。しかし、上京してメディアについて勉強できる私立大学に進学することは、すなわち将来的な出費の増大を意味し、はじめて自身の進路に迷いました。

上京への憧れとも受け取れる変化に、難色を示す人も現れ悶々とする中、声をかけてくれた先生がひとり。学年の先生でもなければ、授業をみてももらったこともない、実は友達のお父さんであった三谷先生。

『本気でなりたいんか?』

その言葉に強く頷き、素直な気持ちを伝えた後、満面の笑みとともに、私の目標をはじめて強く押してくれた先生の言葉には、胸がいっぱいになりました。

本気で何かやりたいと思うとき、応援してくれる人は必ずいて、一步踏み出してみないと何もわからないこと。あのとき気づかせてもらったことは、今でもずっと生きています。

中央大学での4年間は、自分の学びたいこと

を追求するだけでなく、たくさんの整った制度や設備の下で、その時の自分にしかできない経験ができました。学部横断型のプログラムを受験し、近隣の小中学生に向けたスポーツイベントを開いたときは、イベント成功のための人員の集め方や、昨年までにない新たな企画展開などに注力しました。もちろん失敗もありましたが、同期や頼もしい先輩に助けられ、経験にない規模のプロジェクト成功には大きな達成感を感じました。読売巨人軍の冬期キャンプ先に向かったときは、スーパーマーケットで出会った記者にその場で懇願し、帯同させてもらったこともありました。同じ温度感でともに目標へ向かい、切磋琢磨し合える友人もできました。

上京して間もなく、とある球場で声をかけた人は、偶然にも上京のきっかけである記者の方でした。この春から、ようやく目標の人を追いかけられるスタートラインに立ちます。誰かにとっての活力になる記事を創出できる、タフで心優しい記者を目指します。そして、これまでお世話になったたくさんの人に、紙面を通して恩返しができればと思います。

最後になりましたが、多くの先生方に大変お世話になりましたことを、心より感謝申し上げます。先生方や、大切な友人たちに出会えた誠之館高校は、私にとっていつまでも大切な場所です。紙面を見て微笑んでくれるでしょう先生方を楽しみに、今春から夢だった記者としてペンと足を走らせてまいります。